

新刊紹介

◎極東の熱帯多雨林・改訂版 (WHITMORE, T. C. 著 : Tropical Rain Forest of the Far East, 2nd ed. Oxford Univ. Press, 1984, 352 pp. 邦価 約 18,700 円)

本書で扱われている「極東」の多雨林は、主に、東南アジアとメラネシアに分布する多雨林のことである。

1975年に初版が発行されて以来、この10年間に熱帯林への関心と研究は非常に高まり、詳細なデータが加えられてきた。本書の特徴は、「極東の熱帯多雨林に関する広範なトピックを一冊にまとめ、個々の調査・研究を全体の筋道に結びつける」と序言で述べられているように、多雨林生態学の各分野を豊富な事例研究でカバーしていることである。それは、初版で680におよぶ引用文献が、さらに1,100余りにもなっていることからわかる。

改訂版で目を引くのは、まず熱帯林の生長の動態に関する部で、種子の飛散、稚樹の定着過程、森林生産力やバイオマスの各章が、図表を含めて刷新され詳細になっているし、特に、「無機養分と循環」については新しい章が設けられて興味深い。また、Malayan Uniform Systemなどの造林法には、理論的な解釈が加えられているし、多雨林生物学の重要なテーマのひとつである「種の多様性」に関しても、種の進化や繁殖システムの1970年代の研究成果が盛り込まれている。動物については、低地林と山地林での生態の他に、伐採による影響も扱われている。

その他に、初版よりも内容が若干改変されたトピックは、熱帯樹木の開花・結実の季節性、種子の休眠性と発芽、ヒース林とマングローブ林の生理、生態、低地常緑多雨林の変異や熱帯土壌など自然生態の側面の他に、焼畑や熱帯林保護など人間との関わりの部分にも、新しい視点があてられていて、いっそう充実した内容となっている。

初版と改訂版に共通した目的は、多雨林生態学の古典的名著「熱帯多雨林」(RICHARDS, P. W. 著 1952年)以降の研究の進歩を、極東アジアに焦点をあてて網羅することである(初版序言)。特に、熱帯林の気候の季節性、多雨林と各樹種の生長の動態および多雨林群系の変異の問題が、中心的課題である。その点では、RICHARDSの著書と読み合わせると、熱帯林生態学の研究の流れがよくわかっておもしろい。

本書は事例研究やトピックが多いので、専門知識がないと少し難解なところもあるが、実際の多雨林がいかに変異に富みかつ複雑であるかがわかるとともに、生態学の各分野の研究動向に関する様々な情報を提供してくれて、熱帯林生態学を幅広く勉強する上で非常に有益である。(沖森泰行)